

ソーシャルメディアの変遷に伴うインターネット利用者の意識変化について ～“実名＋クローズド”なインターネットの先にあるもの～

[2013・FW] 21021078 橋本詩織

1. 研究の背景と意義

2004年10月に開いた技術会議で米国の技術系出版社であるオライリーメディア社が提唱した“ウェブ2.0”という言葉がある。ウェブ2.0と呼ばれる時代ではウェブサイトの持つ情報や機能を外部から呼び出すことが可能となったということが挙げられる。それまでのウェブサイトは製作者が作った状態で完結したものであり、利用者はそのアドレスに直接アクセスし、利用するだけの関係だった。しかし、ウェブ2.0では利用者や他の事業者がウェブサイトやウェブサービスを組み合わせたコンテンツを生み出すことができるようになった。

これによって台頭してきた技術として検索エンジンが挙げられる。これによりこれまで散在していたウェブ上の情報を簡易な作業で見つけ出すことが可能となった。検索エンジン大手であるグーグルはウェブ上の全ての情報を検索でヒットする、オープンな世界を作ろうとした。

一方、オープンすぎる環境に一石を投じるようにソーシャルネットワークシステムが現れた。これはウェブ2.0によってほぼフルオープンとなっていたインターネットの世界に閉鎖的な空間を生み出すこととなった。本研究ではこの閉じられたウェブ上の空間が登場した経緯及びその後の流れについて注目して行く。

2. 研究目的・方法

本研究の目的は、これまでオープンなものとして周知されてきたインターネットが近年その内部に閉じられた空間を生み出そうとする流れを受けて、この流れがどのような要因によって引き起こされているのかを環境面の変化・利用者の意識面の変化それぞれから見て考察することにある。これを明らかにすることによって、今後のインターネットではどのようなサービスのニーズが高まるか及びインターネット利用者の意識の変化について予測することが可能となる。

3. 研究結果・考察

従来インターネットはオープンであり、ウェブ上にある情報を全ての人が検索・利用可能となるようにサービスを展開してきた。グーグルがその代表的な存在と言える。

一方、そのオープンな空間の中にクローズドな閉鎖空間を生み出すサービスも姿を現してきている。ソーシャルメディアがその代表といえる。これが普及したことにより、人と人とがネットワークで結びつけられ、相互に情報発信を行うことが可能となった。これにより、世の中に流通する情報は爆発的に増加し、必要な情報を見つけることが困難になってきている。この事実がソーシャルメディア普及を後押ししたと言える。

また、インターネットが広く普及し、インターネット上でも利用するサービスによって実名・匿名を使い分け複数のソーシャルグラフを築く傾向が強まった。

他にも、ソーシャルメディアの登場により、「情報を共有して楽しむ」文化が一般的になった。2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災を契機に、今まで重視されていた「お金」以外に「絆」や「信頼」といった要素が力を持ち始めた。またソーシャルメディアの普及により、元来目に見えないものとされていた人間関係や相互の信頼関係といった要素が可視化され、より力を増してきた。

LINEを代表とした「実名＋クローズド」なインターネットが引き起こされる要因となったのは①ソーシャルメディアの普及などによりインターネットと実社会の垣根が低くなり、プライベートなやりとりを求める意識が高まった②東日本大震災の発生などの社会情勢の変化により、近い人との1対1のやりとりの需要が高まったという2つの要素であると判明した。

4. 結論

現在、インターネットではインターネット利用者・インターネットを取り巻く環境共に多様化してきており、今後はサービスの併用のニーズが高まると予測できる。他にも、キュレーター及びキュレーションサービスの進具合によってはキュレーションサービスがクローズドなインターネットの存在を維持したままより多くの情報の共有に役立つのではないかと推測できる結果を得た。